

第一章 赤ちゃんの脳力アップは漢字から

●……世界の学者が「漢字」に注目した

今から一三年前に、当時先進五か国といわれた日本、アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツの五大国の学者が協力して、一つの共通知能テストをつくりました。この中心になったのはイギリスのケンブリッジ大学教授のリチャード・リン博士です。

その共通テストで五か国の子どもたちの知能を測定したところ、日本の子どもたちの知能がズバ抜けて高いという結果が出ました。他の四か国の子どもたちの平均知能指数は100だったのですが、日本の子どもは111でした。

知能指数で111もの差が出るのは大変なことだということで、イギリスの科学専門紙『ネイチャー』に発表されました。

ヨーロッパやアメリカの学者は、どうして日本人の子どもたちの知能が高いのかと疑問を持ちました。

日本の子どもだけが飛び抜けて高いということは、日本特有の何かがあるに違いないといろいろと考えた結果、「漢字」に行き着いたのです。

そして、どうして漢字が頭の働きをよくするかという研究に取り組んだのです。

角田忠信という方が書かれた『日本人の脳』という書物があります。これも『ネイチャー』に「日本人の脳」という論文として発表され、話題になった本です。

この本で、角田忠信さんは、日本人の脳は、世界のいずれの人間の脳とも違う構造を持っているということを発表したのです。日本人の脳に限って、鳥の声や虫の声を左の脳で聞いているということを突き止めたのです。

言語脳というのは左にあります。脳梗塞などで左の脳を損傷すると言葉が不自由になります。また、たとえば、時計を出してこれは何時と聞いても正確に答えられません。時計がどんな働きをするかということはわかりますが、時間を読み取ることができないのです。

このように言語は左脳でつかさどります。音楽やその他の音は右脳で聞きます。つまり言語だけが左の脳で受け止めて、あとのすべての音は右の脳が処理するのです。

ところが、日本人の場合は言葉だけではなく、鳥の声なども左の脳の一部で聞いていたのです。このことが脳の発達を促したというのが、ヨーロッパやアメリカの学者の見解のようです。

ただし、これは日本語を母国語として話す日本人に限るようです。日本人の両親の間に生まれた子どもでも、ヨーロッパで生まれてヨーロッパで育ち、英語やドイツ語を聞いて育つと違います。

その場合、言葉以外の音は、イギリス人やドイツ人と同じように右の脳で聞くのです。とすると、日本語が鳥の声や虫の声を左の脳で聞く脳をつくっていったわけです。

つまり日本語という言葉によって、日本人の脳はつくられるということがはっきりと証明されたのです。

こう考えると、子どものIQの差も含めて、漢字が日本人の脳を他の民族と違うものにしたということになります。同じ日本語でも、かなはアルファベットと同じで表音文字にすぎませんから、漢字にその原因があると各国の学者が考えたわけです。

●……漢字で育った子どもの脳は三倍早く動き出す

一九九六年、電機通信大学の研究室と、NTTの研究所との共同研究によって明らかになったもので、とても興味深い実験結果があります。

これは漢字を見たときに、脳がどのように働くかということを経験的に調べたものです。「漢字」を見た場合は、左脳も右脳も一緒に働いていることがわかりました。

ところが「かな」の場合には、左の脳しか働かないのです。しかも、左の脳で働く部分も、漢字のときに働く部分とは、ちょっと場所が違うこともわかりました。

この研究ではつきりしたことは、われわれはものを見れば、漢字であろうとかなであろうと、見た瞬間に脳が働くだろうと思いついていたのですが、どうもそれは違ったようです。かなと漢字では、脳が働く始動の時間と場所が違うことがわかったのです。

つまり見た瞬間、といっても零コンマ何秒という時間ですが、漢字とかなを比べると、かなのほうが三倍も時間がかかるのです。ですから、漢字で育った子どもとかなで育った子どもとは、脳が働き出すスタートが違うのです。漢字のほうが三倍も早く活動を開始しているのです。

次の二つの文章を比べてください。どちらが早く、かつ正確に意味がわかるでしょうか。

「今日、東京駅に妹を迎えに行きます」

「きよう、とうきようえきにいもうとをむかえにいきます」

零コマ何秒という差はささいな違いじゃないかと思われるでしょうが、とんでもないのです。本を読み出すようになってから、スピードに三倍の違いがあるということは大変な違いです。

私は脳を専門とする学者ではありませんから、くわしいことはわかりませんが、三倍も早く脳が動き出すということは、脳全体の性能も違うように思えてなりません。

私たち大人はなかなかから学習したので、字を見て頭が働き出すのがいつも鈍いのです。そういう意味でも、幼児から漢字教育を始めることは大切です。

ポイント 子どもというのはあるがままをパツと受け入れてしまう、全体的につかむのが得意です。私たち大人は、構成されている細かなものから認識を始めて全体をつかみます。ところが子どもは曖昧なものでも、ぼんやりとしたままでも、丸ごと呑み込んでしまうのです。

●……NHKで取り上げた二歳の幼児の漢字力

九六年一月に東京で国際会議が開かれました。ここで私は、中国や台湾、韓国の一流の学者を招いて、漢字の重要性を発表しました。中国においても韓国においても、漢字を覚える能力は幼児期が高いということが認められてきました。

ことに中国本土では、大変な勢いで幼児の漢字教育が広まっています。北京に国際漢字教育研究会というのができて、私は名誉会長に委嘱されました。石井式幼児漢字教育を中国で普及したいという中国の学者が会をつくり、現在、中国では三〇万人の幼児が学習しています。

漢字教育は非常に重要であると同時に、その漢字を学習する最適の時期は幼児期である、ということを世界中に広めることがこの会の目的です。

世界中の幼児教育は、まだ“成熟優位”の学説から抜け切っておりません。成熟優位というのは、年をとればとるほど学習能力は向上していくから、成熟を待つて学習させるといふ考え方です。こ

れが世界の幼児教育の基本的な考え方と書いていいでしょう。

では、いったい生後一〇か月の赤ちゃんには、どうやって覚えさせるかと思われるでしょう。もちろんまだ一歳にもならない子どもですから、いくら「目」や「耳」と漢字を教えても口では言えません。ですから文字を書いて見せるのです。

赤ちゃんは、耳という言葉の頭で受け入れることができなくても、文字は覚えることができます。信じられないかもしれませんが、ゼロ歳でも可能です。幼児は言葉が言えないうちから、漢字を識別することができますのです。

NHKの『くらべてみれば』という番組で、二歳の子どもにこんな実験をしました。

まず、子どもたちにいるいろいろな絵を見せます。その絵の裏には、一方は漢字、もう一方はひらがなで単語が書いてあります。六人の子どもを半分に分けて、カードを何回か教えてから読ませて比べたのです。読むカードは三枚です。

その結果は、漢字で習った子どものグループは、三人とも一〇〇%読めました。ところが、かな組は三〇%しか読めませんでした。もちろん三〇%でも大したものだと思いますが、この差は単に一〇〇%と三〇%の違いではなくて、漢字のほうが覚えやすいことを実証したのです。私が教えた中では、幼稚園の子どもでも漢詩をスラスラ読みます。

このように、子どもは早くから漢字に対して興味を持ち、反応を示すということをわかっていたいただきたいのです。

●……漢字教育だけで知能指数一三〇の秀才となる！

たとえば「目」のことを英語では「EYE」と言います。「みる」に相当する英語は「SEE」とか「LOOK」とか「WATCH」などです。

EYEは漢字では「目」と書きます。SEEに当たるものが「見(ケン)」、「LOOKは「視(シ)」、WATCHを「観(カン)」とすれば、いずれの漢字にも「目」が入っています。

つまり「目」という字をいったん学べば、これが使われている睡、眼、眠、省、督といった字は、目に関係のある文字であることが当然類推されます。この「類推する」とか「推理する」ということは、

幼児の脳の発達に欠かせない要素です。

私が口が酸っぱくなるほど、くり返している「漢字を教える」のではなく、「漢字で教える」とは、そういうことなのです。

漢字は表音と表意を兼ねています。一般的に漢字は左の部分が意味をもっていて、右の部分は発音を表わしています。こういう体系をもつ文字は、漢字以外はありません。

実は、創作された文字というのは、例外なく表音と表意を兼ねた表語文字です。つまりスメールの文字に始まってエジプトの文字、インドの文字、そして漢字は、表音文字であるアルファベットとは異なり、人類が創作した文字は、すべてこういう体系をもっているのです。ですから、表語文字を学んだ人と表音文字を学んだ人とは、当然に、頭の働きが違ってくるわけです。しかも、それは幼児期に学んだ場合大人になってからその差がはっきりと出てくるのです。といっても、小学校へ上がってから習ったのでは、大した違いは出てきませんが、幼児期に学べば歴然たる差が出てきます。

最初に紹介したIQの11の差というのは、大変重大な意味をもっています。私の実験したところによると、三歳から十分な漢字教育を受けた子どもは、平均知能指数が低い場合でも一三〇になります。一三〇というのは、英才とか秀才と称せられる知能をもった子どものレベルです。こういう意味でも漢字教育を徹底してやっていただきたいのです。子どもの学習というものは、どんな学習でも国語力が基本になっているということを理解してほしいのです。

たし算やかけ算はできるのに、文章問題はできないというのは、算数ができないのではなく、問題の意味がわからないのです。子どもを算数嫌いにさせたくないかったら、本を読むことを好きにさせなければいけません。そのためには、言葉、つまり漢字を好きにさせることです。

ポイント 小学校一年生を担任して漢字を教えてみて気がついたのですが、成績のよくない子というのは漢字しか覚えられないのです。それで漢字はやさしいのだということがわかったのです

●……一日一字で就学前に小学校で習う漢字のすべてが読める

三歳から毎日漢字を一字ずつ覚えていくとしましょう。一日一字です。小学校に上がるまでに三年間ありますから、ほぼ一〇〇〇字の漢字が覚えられることになりますが、これは小学校卒業までに学習する漢字に匹敵します。つまり小学校に入学する時には、小学校で学ぶ漢字がすべてわかって、小学生向けの本は読めることになります。

子どもの知能を伸ばすには、読書力をつけることが必須です。就学前から本を読んでわかるという状態にしておけば、教科書の理解力も高まるわけで、その後の学校での学習にもとても効果的でしょう。

小学校に入学して、理科でも社会科でも、教科書がスラスラ読めるのです。自分で辞書を引いて調べることもできるのです。読めるから面白くなって、ますます読書力が増していくのです。

一日に一字で、すべて覚えられます。幼児期の子どもでも、一日一字ならば無理ではありません。一日一つずつ字を覚えていくのは、むしろ楽しいことでしょう。諺にもありますように、「石の上にも三年」です。子どもの重荷にならないペースで気長にかまえて始めましょう。

●……幼児は言葉を通してものを認識し、記憶する

こういう実験があります。

子どもに一匹の蝶を見せて、「よくこの蝶を見てごらん」と言って観察させます。その蝶の羽に黄色い色をした縞模様があったとします。

「黄色」とか「縞模様」という言葉をすでに知っている子どもは、その色を見て、「この蝶は黄色い」と覚えるのです。縞模様があると「この蝶には縞がある」と記憶するのです。

ところが、黄色とか縞模様という言葉を知らない子どもは、黄色い色を見ても「黄色い」と認識することができません。色も縞模様も、もちろん目に入るけれども、言葉を知っているか知らないかによって、黄色とか縞模様とかの意識が起らないのです。

しばらくして、「さっき見た蝶、このたくさん蝶々の中にいるんだけれど、どの蝶だったか当てて

「ごらん」と言って当てさせます。

すると、言葉を知っている子どもは、ちゃんと正しく言い当てることができるけれども、言葉を知らない子どもはまったくわかりません。

言葉を知っているということは、ものを見るときに言葉を通して見るということです。言葉を通さないと意識になりません。言葉がなければ、ただ黄色い色を見たからといって、黄色だったという記憶は起こらないのです。言葉があつて初めて「ああ、黄色い」という記憶が残るのです。人間というものは、いくら体験を積んでも、それを言葉を通して認識するということをしないと、知識は蓄積されないのです。

子どもの頭の中にたくさん言葉があるということは、ものを見るときにそういう複雑な言葉を用いて、自分の体験を頭の中に認識させていることなのです。脳を活性化するのに、言葉がいかに重要かがわかると思います。

●……言葉の数が少ない子どもは知能が低い

心理学者のポール・ショシャルの言葉に、次のようなものがあります。

「知能は言葉によってつくられる」

どうしてそういうことを言ったのかというと、彼はフランス人ですが、フランスでは多くの黒人がいろいろな仕事に従事しています。アフリカから働きに来ている人が多いのですが、その子どもたちは当然フランスの学校へ入り、フランス人と一緒に学習します。ところが、学校の成績はあまりよくありません。このため、黒人は生まれつき知能が低いという偏見がありました。

そこでショシャルは、この黒人の子どもたち一人ひとりをも、どこで生まれて、どこで育ったかを調べたのです。すると、アフリカで生まれてアフリカで育った子どもだけを集めてみると、たしかに知能が低いのです。

ところが、フランスで生まれてフランスで育った黒人の子どもの知能は、まったくフランス人の子どもと変わらなかったのです。

同じ黒人の子どもでも、フランス生まれのフランス育ちならば、知能はフランス人と同じレベルに

ある、ということ調査によって明らかにしたのです。

つまり知能というものは生まれつきのものではないのです。人種によって知能が低いとか、白人だから高いというのは誤りである、ということがわかったのです。

では、その知能というものは、何によってつくられるのかということ調べると、その原因は言葉にあるということも明らかになりました。

フランス語で使われている言葉は、ボキャブラリーが豊かです。フランスで生まれた子どもたちは、豊かな言葉を耳にして育ちます。だから知能が高いのだと説明したわけです。

フランスに比べて、黒人が使っている言葉は語彙が少ないのです。そういう環境で育った子どもは、一般的に知能が低いのです。

幼児期の子どもに言葉を教えるのは、まず母親でしょう。母親の言葉を通して、子どもの能力が育っていくのですから、お母さんの役割は非常に大切です。母親が言葉の教育に熱心に取り組むことが、子どもの将来に響いてきます。

●……「かな」を読めなかった脳障害児が「漢字」を読めた！

たった一文字のかなでさえも読むことのできない五歳の脳障害児が漢字を教えたらどんどん読んだと思ったら、みなさん、どう思うでしょうか。

そんな馬鹿な……というのが、大方の反応だと思えます。しかし、事実なのです。

その子は一歳半の時にダンプカーにはねられ、頭蓋骨陥没という重傷を負いました。幸い命はとりとめたものの脳に後遺症が残ったのです。医師からは、回復は絶望的と言われていたのですが、せめて自分の名前だけは読めるようにさせたいと思い、それこそ両親は一生懸命になって文字を教えたそうです。しかし、一年たっても言葉は覚えられないし、一文字のひらがなさえも読めないと言っています。

子どものお母さんは、脳に障害があるから言葉が出ないと思います。でも、二年、三年経てば、せめてアーとかウー、マンマといった言葉が出てくると思っていたのです。そうになったら、いろいろな言葉を教えようと考えていました。

しかし、これでは逆です。脳に障害があるから言葉が出ないのではなくて、言葉が出ないから脳が発達しないのです。

脳に障害があったとしても、脳全体に障害が生じているということはないのですから、声をかければ、残った健全な脳がイキイキと動き出し、少しずつ頭の回転がよくなっていくということをお話しました。

そして、子どもの脳を活性化させるためには、お母さんでもお父さんでも誰でもいいから、できるだけ話しかけてやること、そして、漢字を覚えさせることの重要性をお話しました。

毎日、一枚の漢字カードを一五回、一回に一〇秒くらいかけて見せながら読んでやる、という方法を教えたのです。一日の学習時間はわずか二分半ほどですから、この子にとっても負担にはなりません。

ポイント 人間として一番必要な能力というのは本を読む力だと思えます。本を楽々と読めるのと苦労して読むのでは一生の間に大変な違いが出て来ます。ですから子どもにしてやれる一番よいことは、本を読む能力をつけてやること、つまり漢字を教えてやることです。

その後、一〇日くらいたって、七つの漢字が読めるようになりました」と喜びの手紙が来ました。五歳になるまで、まったく文字が読めなかった子どもが、たった一週間で七つの漢字を読めるようになったのです。

半年後、その子どもに会ったら、表情がまるっきり変わっていました。きりっと引き締まったいい顔になっていました。その時には一〇〇以上の漢字が読めるようになっていました。目の輝きも違っていたのです。

そして一年半後の手紙には、「覚えた漢字は三〇〇字になりました。今ではかなもすべて覚えました」とありました。

現在、小学校五、六年生が一年に学習する漢字はおのおの約一八〇字ですが、習得できるのは学級平均で三分の二ぐらいだといわれています。つまり二年間で三〇〇字の漢字を覚えることは大変なことなのです。それを考えると、五歳の脳障害児がこれだけ覚えたということは驚くべきことといえるでしょう。

もつと素晴らしいことには、この子が漢字を覚えていく過程で、情緒が安定したことです。それまでたびたび痲癩を起こしていたことを我慢できるようになったこと、病院で診察を受けるときも聞き分けができて、一人で診察を受けられるようになったことなどが書かれていました。

●……なぜ、脳障害児は漢字が読めたのか

脳障害児や精神薄弱児の場合、言葉に対する反応が鈍いのが一般的な傾向です。言葉を教えるても脳に蓄積されません。ところが、漢字を与えると、びっくりするほど吸収します。

たとえば、『猿蟹合戦』の話をしたとします。「猿」「蟹」「蜂」「栗」「臼」という漢字のカードを書いておきます。

「山から猿さんがトコトコと下りて来ました。川が流れていて、その川の中から蟹さんがジャブジャブジャブと岸に上がってきました。山から下りてきた猿さんと、川から上がってきた蟹さんがひょっこり出会いました」

というように話を進めていきます。

「猿さんが……」

というところで、「猿」という漢字カードを見せます。

蟹の話のところでは「蟹」の漢字カードを見せます。

こうして話が終わった後で、これらの漢字カードを見せると、ちゃんと読みます。今までひらがなも読めなかった子どもが、「猿」や「蟹」という漢字は容易に読めるのです。

脳障害児の場合、どうしても言葉が少ないのです。これを増やしてやらなくてはいけないのです。目に輝きがないのは、脳が働かないからです。頭を使うことを覚えれば、目の輝きが違ってきます。今の日本では、脳に障害があるという理由で「かな」しか教えません、この子たちにとって、つかみどころのない抽象的なかなは非常にむずかしいのです。

どんなに足の弱い子だって、使っていれば足の筋肉が発達して足は丈夫になります。ところが足の弱い子どもは走ったり歩き回ったりすることが嫌いです。でも、一〇メートル歩ける子に毎日一〇メートルずつ歩かせていけば、そのうち二〇メートルの距離を歩けるようになるのです。

脳も同じです。初めから過大なことをやってもできません。脳に障害がある子どもにとって、かなを覚えることは、たいへん無理な仕事です。苦痛です。そういうことを要求されるから嫌になってしまうのです。

このため、一年たっても「い」の文字ひとつを覚えることもできないのです。ところが、漢字はその場で覚えてしまいます。自分で覚えることができるから、たいへんな喜びを感じます。

これを毎日やっていけば、自然と障害のない箇所脳が働いてきて、目に輝きが出てくるようになります。漢字を覚えて本が読めるようになると（漢字が読めるようになると、かなやカタカナは自然と覚えるようになりますが、これは後で説明します）、ますます頭が回転してきます。つまり漢字によって、脳の別の部分が代替えしてくるのです。

言葉をつかさどるのは左脳ですが、漢字の場合は右脳も働いています。とすれば、もし左脳の一部に欠陥があったとしても、右脳で補うこともできるわけです。

●……二歳の幼児が「教育」という漢字を読んだ！

脳障害児だけでなく幼児が漢字を読む——と言われても信じられないでしょう。もちろん自身、最初から幼児が漢字を読むと知っていたわけではありません。

漢字はやさしいということを知るきっかけを与えてくれたのは、実は、私の長男です。

息子がまだ二歳になるかならない、よちよち歩きのところでは、『国語教育論』という本を炬燵こたつに入って読んでいました。そこへ、息子が来て、私の膝へ上り込んできたので、読んでいた本を伏せ、表紙を上にして炬燵の上に置いたのです。

そのとき、二歳の息子は『国語教育論』の「教」という字を指さして「きょう」と言ったのです。びっくりしました。どうしてこんなむずかしい字が読めたのかと不思議に思いました。たまたま当たったのだらうと思っていると、今度は隣の「育」という字を指さして「いく」と言ったのです。まさしく「教育」という漢字を読んだのです。

驚きました。妻に「この字を教えたのか？」と尋ねました。妻は教えた覚えはないと言います。教えてもないものが読めるわけはないだろうと、しばらく考えました。

そのうち、妻が「アッ！そういえば一度だけ読んでやったことがある」と言い出したのです。当時、妻は音楽の教師をしており、『教育音楽』という雑誌を定期購読していました。あるとき、息子が雑誌のタイトルを指で押さえて、「これ何？」と聞くので、一度だけ読んでやったような記憶があるというのです。

そんなこともあるのか……私も半信半疑でした。普通では考えられないことです。

しかし、大人にしてみれば記憶が定かでないことでも、母親の持っている雑誌に関心を抱いていた子どもにとっては、たった一回でも「教育」という文字と発音とが頭の中に入ったことは事実です。このとき、ひよとしたら、幼児にとって漢字はやさしいのかもしれない、という気がしたのです。私たち大人は、漢字はむずかしい、幼児に教えるものではないという先入観をもっていますが、そうではないのかもしれないと考えたのです。私の漢字教育はこれがきっかけとなってスタートしました。